慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	人文地理學(西岡秀雄著, 櫻書院刊)
Sub Title	
Author	井口, 悦男(Iguchi, Etsuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1957
Jtitle	史学 Vol.30, No.1 (1957. 7) ,p.131- 135
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19570700-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の如く應神天皇と擬定することは全く見えない。そのため江戸時代より色々説が分れてきたのであるが、博士は第三説の立場をとつている。卽ち八幡神をいかなる神としても比咩神はその后神であるとし、その例證として春日、枚岡、平野の諸社における比咩神は何れもその主神の后神である點を擧げている。この樣な他社との比較檢討は他に類例をみない卓見であると考えられる。

以上明治四十一年の本稿と昭和十三年の前稿との論旨を比較檢討してみると、本稿で取扱つた祭神の問題はそのまゝ採用されているが、八幡信仰の原始形態に關する項は全く新に加筆せられたものであり、八幡信仰の根源的信仰形態の解明は本書で最も價値ある項である。たゞこゝに希望をのべるならば、八幡祭神が八幡信仰の原始形態たる巨石崇拜、御子信仰とどの樣な關聯をもつて關係づけられ、又八幡宮內部での祀官の派閥と女禰宜や奉祀祭神の關係も言及されていたならば、より完全なものになつたであらうと推察される。

その他本稿で特色のあるのは各時代毎にその時代の神道思想の概觀であり、何れも一讀の價値ある項で中世における石淸水八幡宮の別當、神人の活動や、持明院、大覺寺兩統の迭立の際における託宣の內容等非常に興味深い記述がある。

五

以上が「八幡宮の研究」における特筆さるべき點の極く一部分を紹介したのであるが、綜合して考えてみると、八幡宮のみを取り擧げて論考した專門書は一冊も世に現れなかつた現在、本書は最も廣範で信憑性のある八幡信仰の專門書であり、當時のオーソドックス神祇史學の一典型として神祇史研究上の大いなる業績であると共に、後進にとつても有益なる刺戟となつて今後八幡宮研究が發展するものと信じて疑わない。大方に一讀をお奬めする所以である。

（一九五七・五・二〇　佐志傳）

人文地理學（西岡秀雄著　櫻書院刊）

本書は大學生向の入門書乃至講義の副讀本として『大學教養講座』シリーズの一部として刊行されたものであるが、その特徵とする所は從來この種の概說書がともすれば經濟地理、集落地理、人口地理等に於ける分布論を中心として說かれる傾向が顯著であつたのに對し、これ迄大きく採り上げられることの少なかつた生活地理、文化地理（氏の分類による）を中心としてとり上げている點にある。中でも生活地理の一部門として自然的災害に大きく目を向けられているのはその方面に對する人文地理學側からの分析解明が强く要請されている際であるだけに、特に注目に値しよう。この自然的災害は戰後の日本再建の鍵を握るとも云われる國土綜合開發計畫の進展を年々大きく阻害して來たものであり、そ

れに對する保全防止策が急務とされ、最近その方面に關する專門的研究も進んで來たと云えるが、氏がその點に着目されたことは見逃せない。氏は更にそれのみならず火災、交通事故、騷音から放射能害に至る、最近の日本で一段と問題になつて來ている人爲的災害についても目を注がれており、そしてこれらを併せて災害地理として取扱う時、その基本的要素として何々が擧げられるか極めて詳細に論ぜられているのである。又文化地理の一部門として、民俗地理を設定し説話傳承の分布に関する地理的考察をされ、更に文藝・工藝・演藝を研究對象とする藝能地理を提唱され、こゝでも亦それらを特徴づけている地理的要素の基本面に意を向けられそれを氣候的要素から主として追求している點などが注目される。このように本書は現在の要請に答えられる面と共に、從來大きく取上げられず又系統的研究のされてない對象を今後の問題として提起されている點で特色ある人文地理學の概説書と云えよう。そしてこの樣な面を突いた獨自の内容を有する本書が刊行されたことは、教養として學習される學生は勿論、人文地理學に新たな展開を與えんと志しつゝある學生のみならず專門の研究者にとつても示唆する點が多いのは甚だ喜ぶべきことと云えよう。

さて本書の編成は序論三章本論四章からなり、序論は理論地理學とし第一章地理學の發達、第二章地理學の本質、第三章地理學の分類・構成に分れ、本論は人文地理學とし第一章經濟地理、第二章政治地理、第三章生活地理、第四章文化地理となつているが、本論の章立ては氏の分類の結果に準據することは云う迄もなく、また先に述べた如く本書の殆どが第三、四章に當てられている。すなわち頁數で示せば、本文二六二頁中第七〇頁以降全てがそれらである。そして災害地理（七〇頁）民俗地理（一九頁）藝能地理（三八頁）にそれらの⅔を費やし、これに反し政治地理は僅か一頁で終つていることは氏の重點が奈邊にあるか明確に物語るものに外なかろう。

ところで各章に展開される氏獨自と云うべき例證はそれ〴〵甚だ興味深く一つ一つが貴重であり、こゝで大方に傳うべき秀れたものであるが、今それらを一つ一つ紹介すべき余裕もないし又筆者に評すべき力も有してないので以下特に擧ぐべく氣付いたものを二、三紹介させて頂くことで當面の責を果したいと思う。先ず序論にあつては第三章にみられる氏による地理學の分類・構成が第一に注目されよう。今その中で人文地理學の分類の部分を示せば次の如くである。

人文地理學

(1)　經濟地理學

産業地理學（水産・牧畜・林業・農業・鑛業・工業資源）

商業地理學（國内産業・貿易）

交通地理學（運輸・通信）

勞働地理學
(2) 政治地理學（政治・法律・植民・軍事）
(3) 生活地理學（被服・食糧・住民・集落・人口・景觀・觀光・社會・衞生・疾病・災害など）
(4) 文化地理學
民俗地理學
言語地理學
藝能地理學
文藝地理（文學・文字・書道）
工藝地理（建築・彫刻・繪畫・染色・寫眞）
演藝地理（音樂・舞踊・演劇・映畫）
宗教地理學（キリスト教・インド教・佛教・回教・神道など）
道德地理學
教育地理學
思想地理學

この分類で直ぐ氣付くことは生活地理學という範疇を設けてそこに衣食住關係以下集落・人口・景觀・社會・衞生・疾病・災害など生活關係の地理を位置付けていること、又文化地理學の內容を明確豐富にされ更にこれを細分し、その中に民俗地理學・藝能地理學を新たに提唱されていることである。この點にも既に氏の力點の所在が窺い知られる。さて氏の分類・構成上の最大の特徵は、地理學全體を動態地理學として把握されていることにあると思う。すなわち現在の空間を取扱う地理學は靜態的地理學（二次元的）とみられるが、それを本當に理解する爲には時間の經過歷史的變化の概念が常に導入される必要があり、動態的地理學（三次元的）とならねばならぬとされる。更に云えば時の經過と共に隣接諸科學の發展と相俟つて一般地理學が發展すると同時に地誌も解明されて來、理論地理學を心とし隣接諸科學に接觸している地理學の圓は過去から現在そして未來へとその內容を豐富にしつゝその圓を擴大して行くもので、全體としてみれば圓錐形的構成大系を有するものであるとされるのである。從つて歷史地理學はその圓錐の人文地理側の側面に、古地理學は自然地理側のそこに、地理學說史は軸として位置付けられている具合である。かゝる分類・構成は地理學と歷史の密接さを適確に指示すると同時に從來のそれの不備を突いたものとして又より妥當なものとして高く評價されるべきものではなかろうか。なお第一章で地理學發達史を述べた後に多く頁をさいて探檢・旅行・著作・地圖を含めた地理學發達史年表を入れられていることは一見してその確實なる過程を知り得て便利であり親切なものと云えよう。しかしながら理論地理學と命題された序論を通讀する時、第一章で地理學の本質あり方を眞に理解するには先ず發達史を顧みて悟られるとされるのは尤もであるが、古代にいささか筆の片寄つた感のすることは殘

念である。古代のそれと同時にいやそれ以上に今日の爲に地理學成立時代以降の發達史について筆を强められて欲しかつた。更に慾を云えばこの學問の道がいずれの方法論の前に開かれているか氏の展望が示されていたなら更に力强いものとなつたであろう。又第二章で地理學の根本的三概念、地域・分布・環境に從つて觀察されたものがいずれも地理學的研究であると規定されるに終つているのはいささか簡單に過ぎはしなかつたか、例えば環境についてもそれを如何に扱うかが問題であり、も一つ突込んで環境と人間生活との關連につき氏の採られる立場をこゝに豫め打出して置いて頂けたら、本論に於ける諸例がとかく自然環境から來る制約を强調する論であるために氏が恰も環境決定論者かと疑われずに濟んだことと思うのである。勿論この序論三章が本論の導入部として書かれている點に立てば、充分それを果していると云えようが、ただ理論地理學との命題は、こゝではむしろ「地理學の基礎」とでもされた方がより內容にふさわしい題であつたのではあるまいか。

さて本論の全體を通じて感ぜられることは、第一に氏の地理學を支えるものが歷史學、民俗學を主體とする廣汎な諸學の知識にあること、そしてその該博さであろう。その一端は例えば民俗地理の項で既にその詳細な本誌に發表されているが「兎と鰐說話の傳播」（史學二九―二、三）について述べられている所に窺われる外、音樂地理の項で音階、旋法を利用されたり、その他一、一の例示は避けるが天文學・氣象學・地震學・動植物學・言語學等とのデーターを縱橫に利用されている點などに窺い知られるのである。さて次に擧ぐべき本論に見られる特色は氏は日頃から社会現象に於ける自然の制約や影響に對する基礎的研究の重要性につき强調されているが、本論にあつてその主張を多く氣候的要素から指摘、解釋していることである。しかもこれらの理解を含め、その他氏の云わんとする所を容易ならしめる爲全卷に涉つて非常に多くの氏の原圖或は作圖になるグラフや圖表を驅使されて鮮やかに浮彫りさせているのは、氏の特技と稱すべく、他に絕對追從を許さぬ特色であり大いに注目される點である。ところで基本的制約面を構成すると云う氣候的要素の指摘についてはグラフや圖表と共に例えば經濟地理で水產業と自然環境につき言及され、そこで魚と水溫、氣壓、雨量の關係の密接さを紹介されたり、變つた所では疾病地理の項で外國の研究による緬羊斑と自殺の關係、磁氣擾亂と死亡關係圖などを例示されるなど、又災害地理の所に示された瀨戸內海の月別霧月數と船舶遭難回數の相關圖や東京の月別出火數と氣溫・濕度の相關圖などは効果的なよい例としてあげられよう。文化地理の藝能地理の項に於いても例えば各國の文學が如何にそれ〴〵の自然環境に負う所が大であるか、氣候條件の差異と文學の相異との相關關係が、よく捉えられると說明され、音

樂・舞踊に關しても同樣なことが窺えると云われ、更に民謠の音階、旋法などからも明確に地域性が讀み取れ、その氣候的制約の面、又文化傳播經路を物語る面など、この方面からの地理的研究が可能であると示唆されている。それは更に宗教も民俗も道德も犯罪も充分氣候條件に基本的に左右された所產であり、今日都會生活を頂點とする文明社會の各部分的現象にすら、自然の大きな制約が尙も讀み得ることを力說されているのである。かゝる氏の取上げ方、自然環境中氣候的要素との關連、制約から說明される行き方は、氣候七百年周期說の結實にみられるように氏がハンチントンの影響を受けられた結果にもとずくものと思われ、中には周期說を前提とせぬ場合やゝ理解しがたい箇所もあり、恰も特異な論、やゝ誇張すれば地理學に迂遠な奇拔な意見を發表されるかに見られるが、併しよく本書を通讀されれば氣付かれることと思うが、氏の意圖する所は奇警な論になく實は甚だ地味な部分にあると云わざるを得ない。それは歷史學に於いて實證が基本であり今日も尙我が國にあつてこれが理論以上に掘下げられる必要の認められるれのと同樣に、地理學の側にあつても現象を解明するに際してまだ〳〵基本的な面に於いて余り氣付かれずして問題を解く鍵を藏する要素の多く殘されていることを强調されているのに外ならない。そしてそれらをより明らかにしその成果を繰込んで行くことによつてより正しい把握そして解明の道が開けて行くことを指示されているのであり、手元を更に廣く見渡せと强調している點に本書に於ける氏の眞骨頂があると思うのである。その點はこの書もまたオーソドックスなものとして指摘出來よう。

以上本書の一部に觸れたに過ぎず甚だ不充分な紹介に終つてしまつたが、一言にして云えばより廣い知識の下にこそこの學問の發展がありその必要を力說されたのが本書であると云える。かゝる本書に對しこの面に一層注目し廣い土臺の上に伸びて行く學徒の出ずることが待望されるのである。ともあれ本書を手にする時嘗ての樂しい氏の講義に再び接する思いを禁じ得ない。飽かせず讀ます概說書として一讀をお奬めする。〔A5判　橫組　本文二六二頁　參考文獻三二頁　國別地理學雜誌目錄九頁　索引四七頁　上下二冊本及び一冊本　三一年四月（上）・六月（下）九月（一冊本）刊〕（井口悅男）

彙　報

三田史學會例會報告

第四四七回例會　昭和三二年五月一日　於六番教室

コンスタンチヌス改宗の問題　近山金次氏